

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

情 報 局 編 輯 二 十 月 三 十 日 第 三 五 一 號

札立の時

精神は
三ヶ特別攻撃隊の
勇士に続き
敢闘は
三ヶ志士の
勇士に劣らぬ

真 實 週 報



鏡當りしてもB29の
巨砲を叩き碎し、屠
龍の名をさらに轟か
さんと必中の腕を撫
し、一剣を磨く内地
制空隊勇士
〇〇基地

「防空はわれらの戦ひだ。われらの手で消し止めなければ、無謀な」と同志連年の「防空」は、十一月二十七日の敵機を大和一枚して撃つに決した



死闘の勝利

大東亞戦争勃発以来、或ひはそれ以前から軍事に必要とされてきた敵の空襲も、に現実の事態となり、敵の空襲は現実となつた。しかも敵の空襲は現在にまだ前哨戦に過ぎず、いはゆる本格の地に達するのは将来の情勢である

いま、支那大陸方面における敵基地は暫く措いて、帝都を中心とするわが本土重要地区を狙ふ中部太平洋マリアナ基地の敵情をみる。既に基地整備の段階を終り、代将ハンケルを長とする第二十一機隊が進出を完了してゐる。現在のところ、マリアナ基地群における敵機の数は、B29を基幹とする大型機約百機とみられてゐるが、これ以外に百機を収容する鋭格を持つといはれる。敵がこれら大型機の威力を全般的に活用し、レイテ作戦の増強と相俟つてわが本土爆撃を飛躍的に強化して来ることはいふまでもない。前駐日大使スルも、去る十一月二十八日の放談で「B29による東京爆撃は今後も繰り返さるべく次第にその熾烈さを増してゆくであらう」と演説してゐるし、さらにハンケルは「B29の爆撃は未だ真珠の域を出てゐない。今後いよいよ激然と本格爆撃を加へる」といふまでである

これらの言を信つてもなく、敵の本格的爆撃はこれからである。勿論われは、既にこの日のためにこの数年間の訓練を積み、準備を整へ、心構へを整へて来た。われは不

三十日の夜が明ければ、まづ防空委員の機嫌「彼が、傾いて居る外に二つが機嫌として覆された。腹が出来た者は「家々を後付たつて何だ」ととるが如く



敗の防空陣ありと断言するのには、決して言葉を用ひるものではない。だが、かゝる事態に直面したこの際、われはもう一歩敵の空襲とは何であるか、その本質的な性格を十分に認識する必要はないだらうか

もちろん敵の空襲には、わが直接戦力の低下や補給の遮断を狙ふ戦略爆撃、或ひは神経戦的な性格を帯びた夜間爆撃、または専ら人畜の被害を目的とした都市無差別爆撃など、その方法にはいろいろある。だがそのいづれにせよ、敵の空襲によつて、直接戦力を強ひられるのは誰だらうか。結局はわれは國民である。これが敵の空襲の本質的な性格である。如何に軍の活躍が完結であつても、敵は空襲によつて、その何分の一かの目的を達し得ることは常に言はれてゐることであり、敵が空襲によつてわれは國民に挑んで来る戦ひを回避し、その責任を専ら軍に轉嫁しようなどといふ考へ方はこの際、一掃しなければならぬ

盟邦ドイツが稱へてゐる「國民戦争」は、既に敵の空襲において、その全貌を現はしてゐる「國民戦争」これこそ空襲の本質的な性格であり、われはこれを十分に入念に準備を前にして敵は、例の惨忍ならず笑ひを浮かべながら「おい、ジャブ、ゆくぞ」と身構へてゐる。われは國民

民は、この敵に後を見せるか。否、特別攻撃隊の勇士たちと同じ血を流した國民が、ひとしく胸じて「否」と答へることであらう。われは國民は、この敵に黙然と立ち向ひ、立派に戦ひ勝たねばならぬ

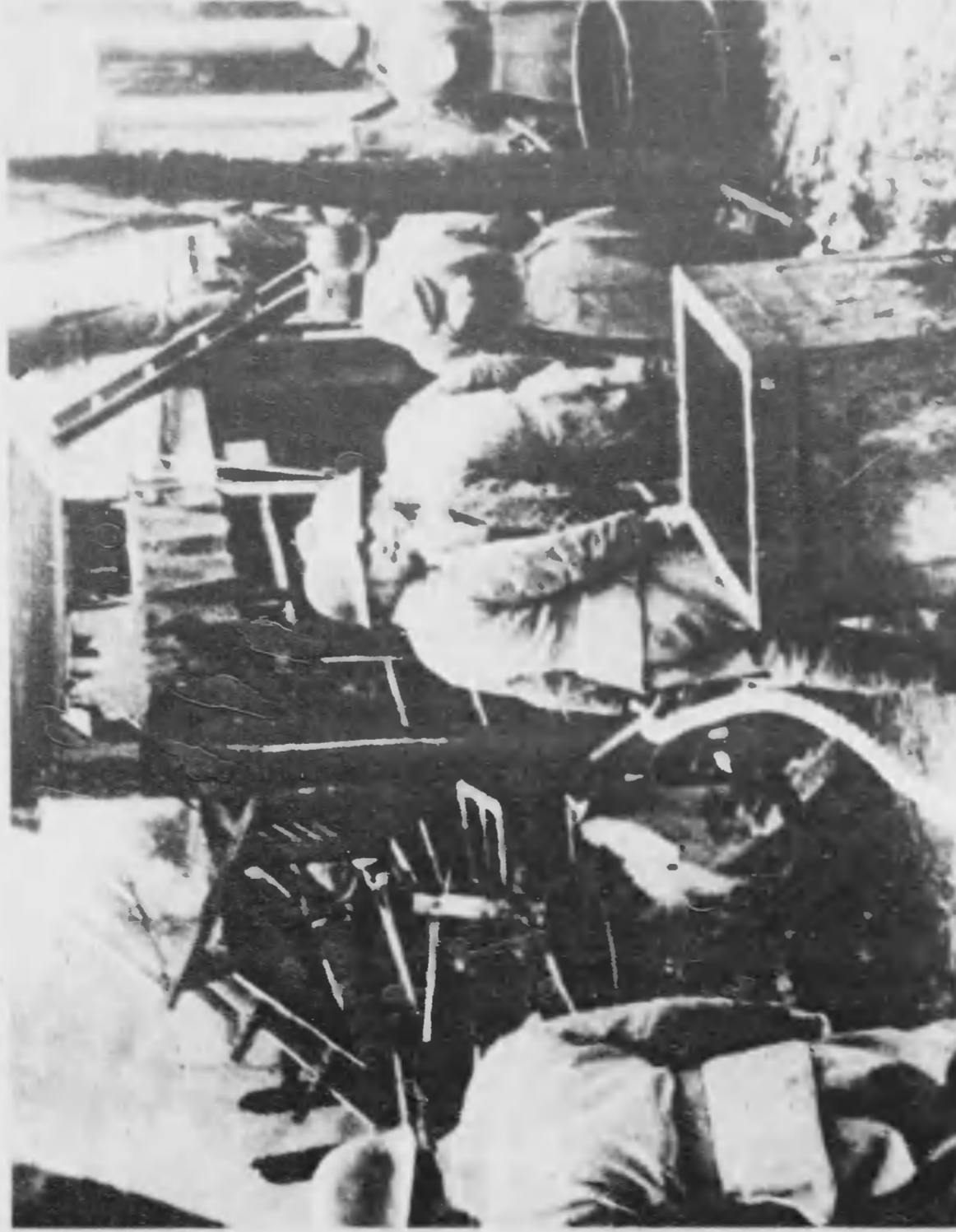
敵イギリス國民でさえ、これをなし遂げてゐる。一九四〇年北極海ドイツがあの大規模なイギリス本土爆撃を敢行した時、イギリス國民は、戦局は悉く彼に非で、全く暗鬱な気分の中、よく空襲の惨害に堪へ、あくまで戦力を維持し、連戦連勝の活躍と相俟つて遂に狂瀾を倒すに成功した。最近イギリス政府が発表した自衛によると、市民の死者は五万七千二百五十八名、傷者七万八千八百八十八名、さらに家屋の全壊乃至半壊は四百五十万戸(全國の戸數二千三百萬戸だから、だいたい三戸につき一戸の割合)に上つてゐる。しかも被害は増加し続けている

我々は、われらの盟邦ドイツ國民はどうか。ハンブルグ大爆撃の惨劇は未だ耳新た

なところであり、その後、度々重なる大爆撃で首都ベルリンを始め各都市は破壊と化し、最近では敵大型機三千、五千、或ひは七千と、まさしくドイツ全土を徹はんばかりに連環爆撃を加へてゐる。しかもドイツ國民は少しも動ぜず、最後の勝利を期して敢闘してゐる。最近ラベルス宣稱は、敵の首領に辱された國境の一都市を訪問、市民の敵意に對するヒトラー総統の感謝を傳達する共に、一軍需工場で「獨逸の技術並びに科學陣は、或る決定的戦場において反機軸の機先を制するものとして期待されてゐる。ドイツ制空陣が素晴らしい成果を収めるのも近い將來ではあるまい。ドイツ國民は戦ひ抜いて勝利の日に備へる以外なすべきことはないのだ」と演説してゐるが、これこそ、あくまで敵の空襲と闘ひ抜いてゐるドイツ國民の精神たる真氣を如實に示すものでなくて何であらう

われらの盟邦はかくて戦つてゐる。敵また然りである。何でわれらが、敵の挑戦に對し

十一月三十日夜半の空襲には、在東部隊の一部が出動して、破壊防衛や避難者の誘導、救護ばかりでなく、復讐作業に當つたが、キビしくしたその活動は、民防隊を鼓舞した



て怯むところがあつてよくだらうか。われもまた敵の挑戦に昂然と胆をあげて戦せんとするものである

空襲は國民の戦ひなり。この本質的な空襲の性格にわれらが徹したとき、豁然として勝利の大道はひらける

われはこれまで幾度も「待つあるを待む」態勢を強調した。これを更に「空襲は自分たちの戦争だ」といふ自覚と決意を基礎にして再検討するとき、防空対策は全面的に飛躍的な強化を見、空襲下の活動並びに生産増強、さらに戦後の対策でも全く開眼するところがないはずである

訓練準備には、これで完結だといふ極限はない。間引隊も、老幼婦女子の隊も、待避所の強化も、さらに今後に残された課題である

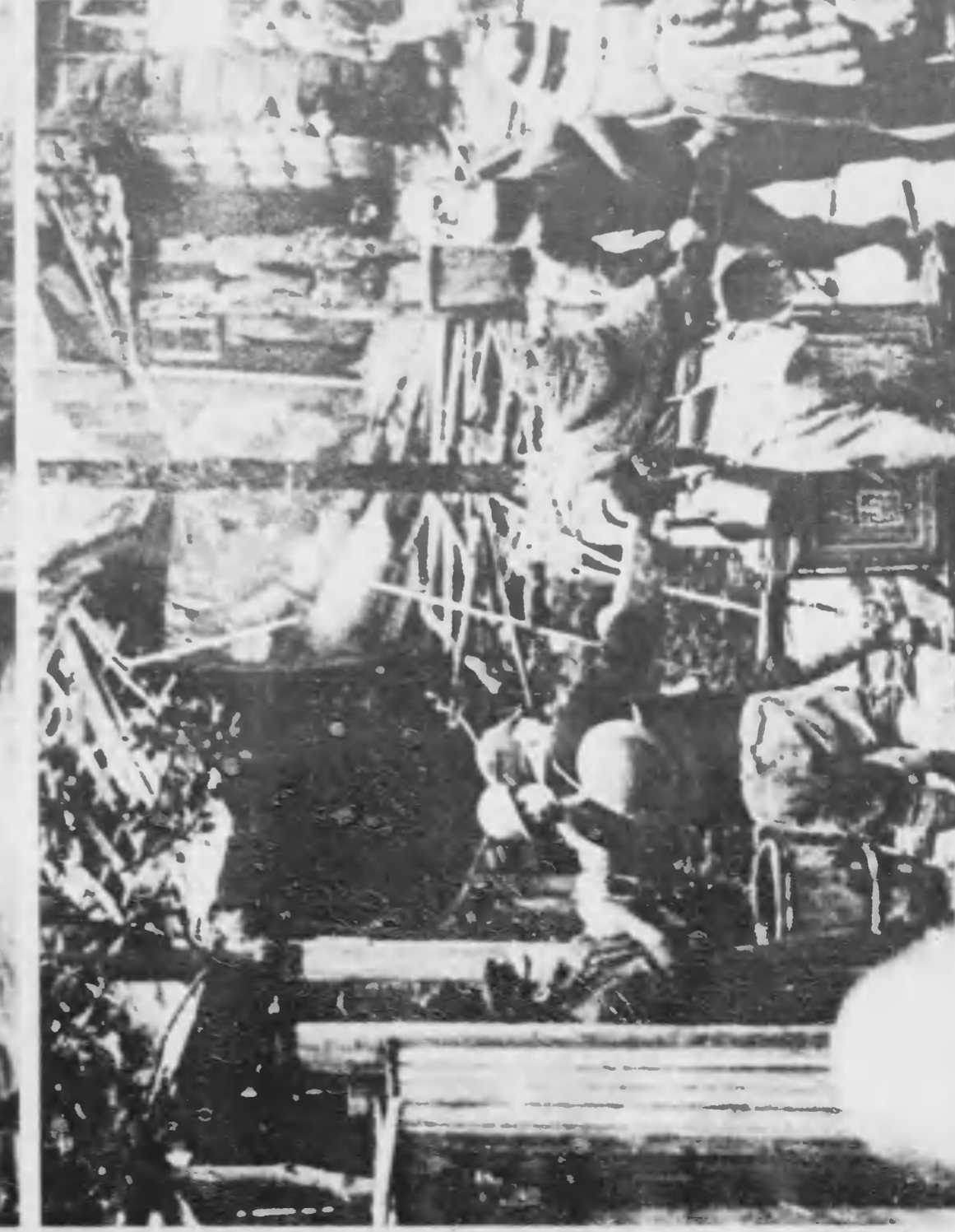
強行に實施された前後には、多くの問題を

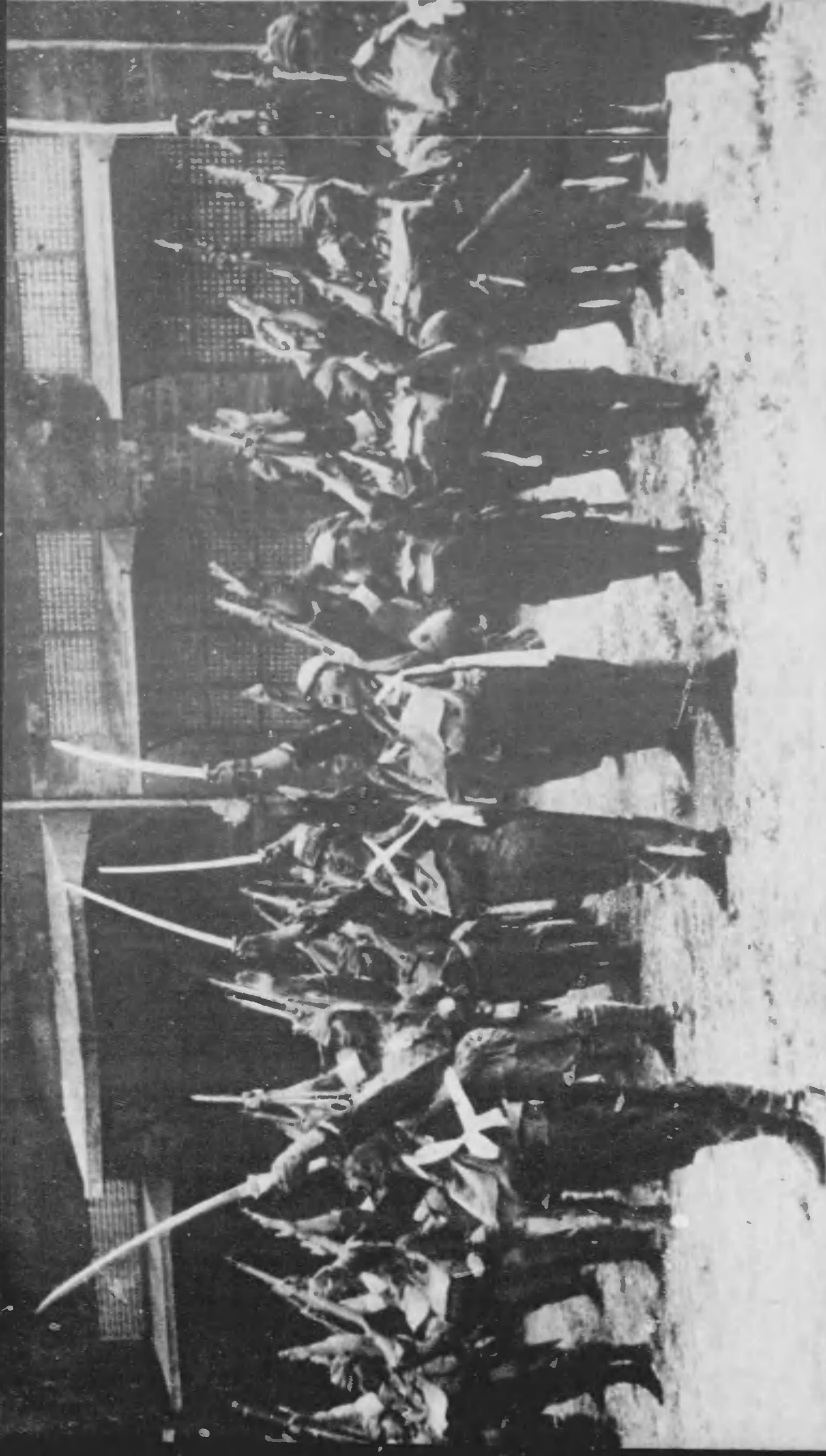
投げかけたかたにみる早業隊も、今にしてみれば「あゝ、よかつた」といふのが、現も手も、感らざる心境だらう

また、十一月二十九日の夜半から三十日の拂曉にかけての帝都の夜間首領の際、既に妻子を疎開させてゐた一環業者は、自分は健け出されながらも、猛炎と闘ひながら「我勝てり」の確信を得たと語つてゐる

急遽に戦闘準備を整へよう。訓練の周到と準備の萬全こそ、不屈の闘争の根源である。精神においては陸海の特別攻撃隊勇士に続き、敢闘においてはラベウルの勇士に準ぶ。これこそ國民戦争、即ち空襲を戦ふわれら國民の一大機軸でなければならぬ

われらは絶対に皇軍の作戦に信頼し、眞摯にして、なほ明朗な敢闘を続け、こんど強化される敵の本格爆撃を戦ひ抜かうではないか





空襲をこめて
空襲隊員中隊前(向
つて右)の手を振る
重水爆機(左)

特別攻撃隊 相次ぐ壮挙

レイテ島をめぐる日米の決戦は地上隊以来五旬に及び大消耗戦の様相を呈して、いよいよ激化の一途を辿つてゐる。わが軍は緒戦の善戦なる艦隊決戦に続いて日夜繰返される航空決戦、また地上部隊の勇猛挺身奮進など猛攻に次ぐ猛攻を以てし、遂に壮烈戦史に比なき一機一艦必殺の神鷲や敵中着陸の空挺部隊等、陸海軍特別攻撃隊の出撃となつて、敵に一大痛撃を加へつゝある。敵が相次ぐ大消耗にも拘はらず、雄大な物

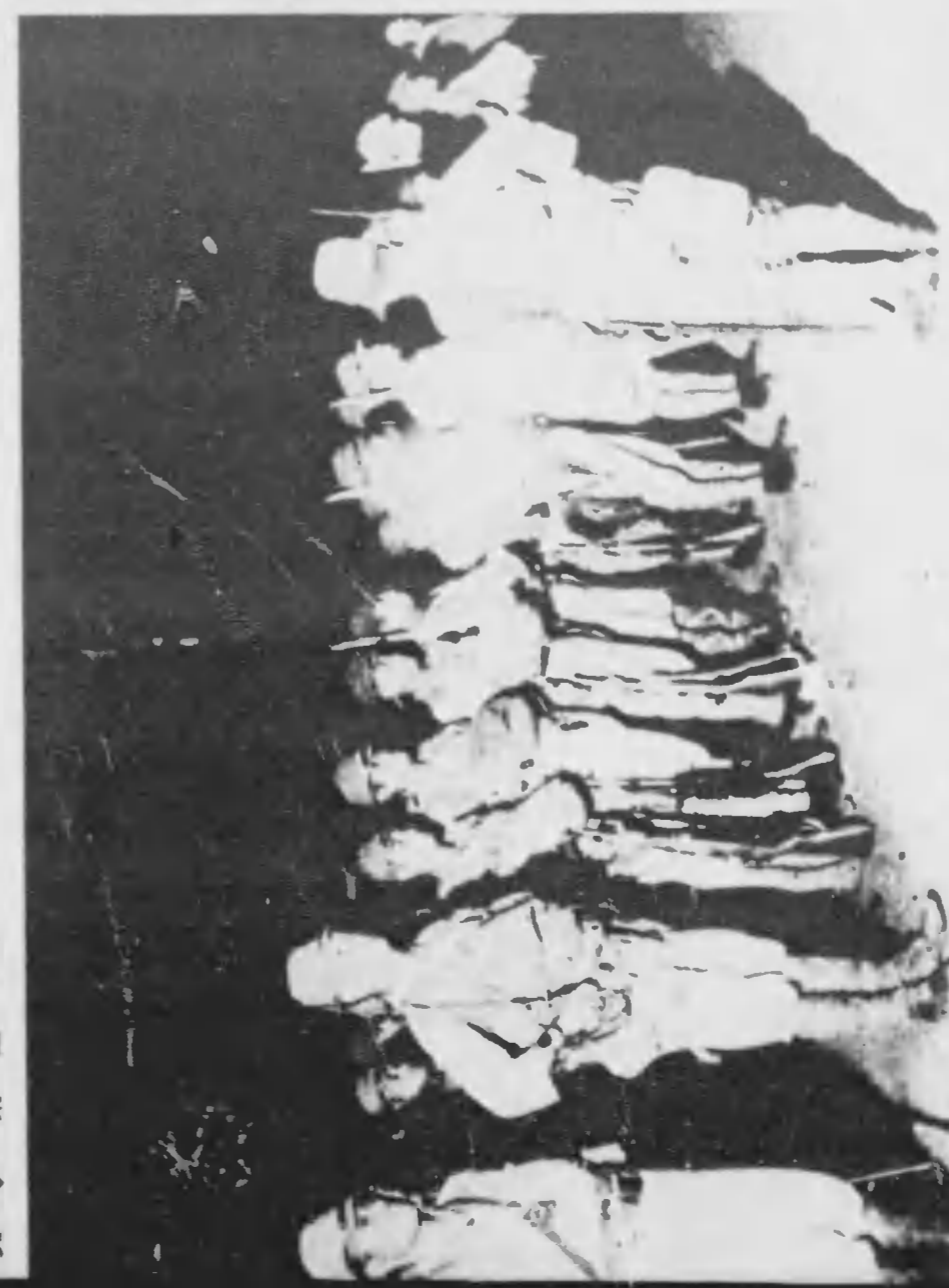
烈熾戦決行

滅亡の國境を沸かせ、敵艦の轟撃を善戦し、決死隊飛行場を奪還せんとする。特別攻撃隊(空襲隊)の出撃直前(前の機體には機銃が入つてゐる)

出撃直前隊員の訓示を告げる「機」隊員



量と兵員を注ぎ込んで必死の攻撃を加へて來るのも、既にこの一戦を日米決戦の眼目としてゐるからである。いまや戦局は漸次われに有利に轉回し、當初よく優勢な敵を支へて重要陣地を死守したわが守備部隊は、續々到着する新鋭兵團を迎へて陣容を強化し、近く一大攻勢を開始して徹底的に敵を粉砕せんとしてゐる。國民もまたこれに應へて各、その本分を盡し、生産に、防空に、生活に、全力を投じて戦ひ抜かう



この機銃刀で老兵の遺つ直を叩き落して 後容として遺棄機に降り込む「機」隊員と充實一ぱいの「機」隊員(右端が加米少尉)



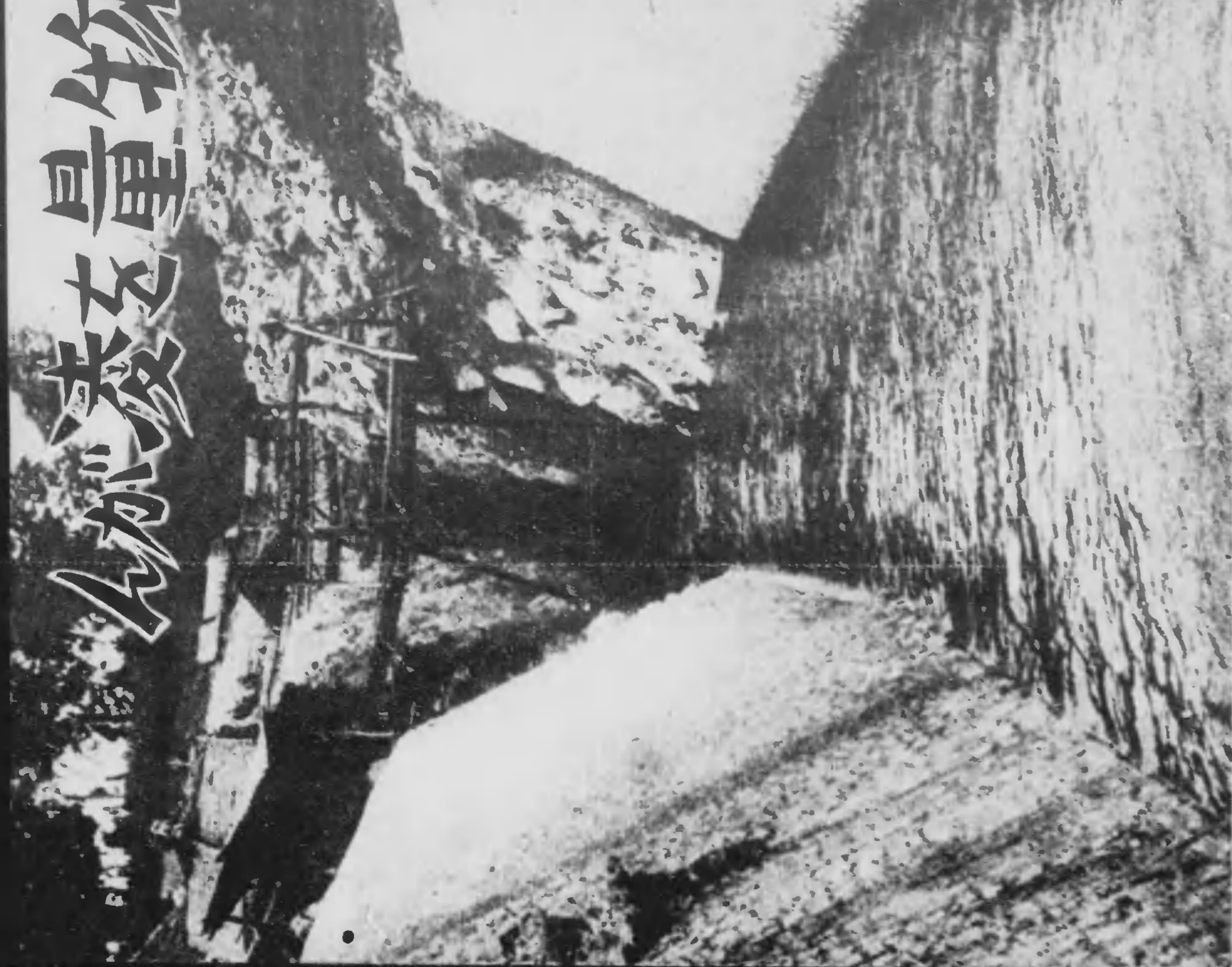
敵の量産を凌ぐ



□ 岩壁に懸架した大屋根が花咲く今日の知水氏



□ 外流は陸道を通じて、酒々とインド洋へ



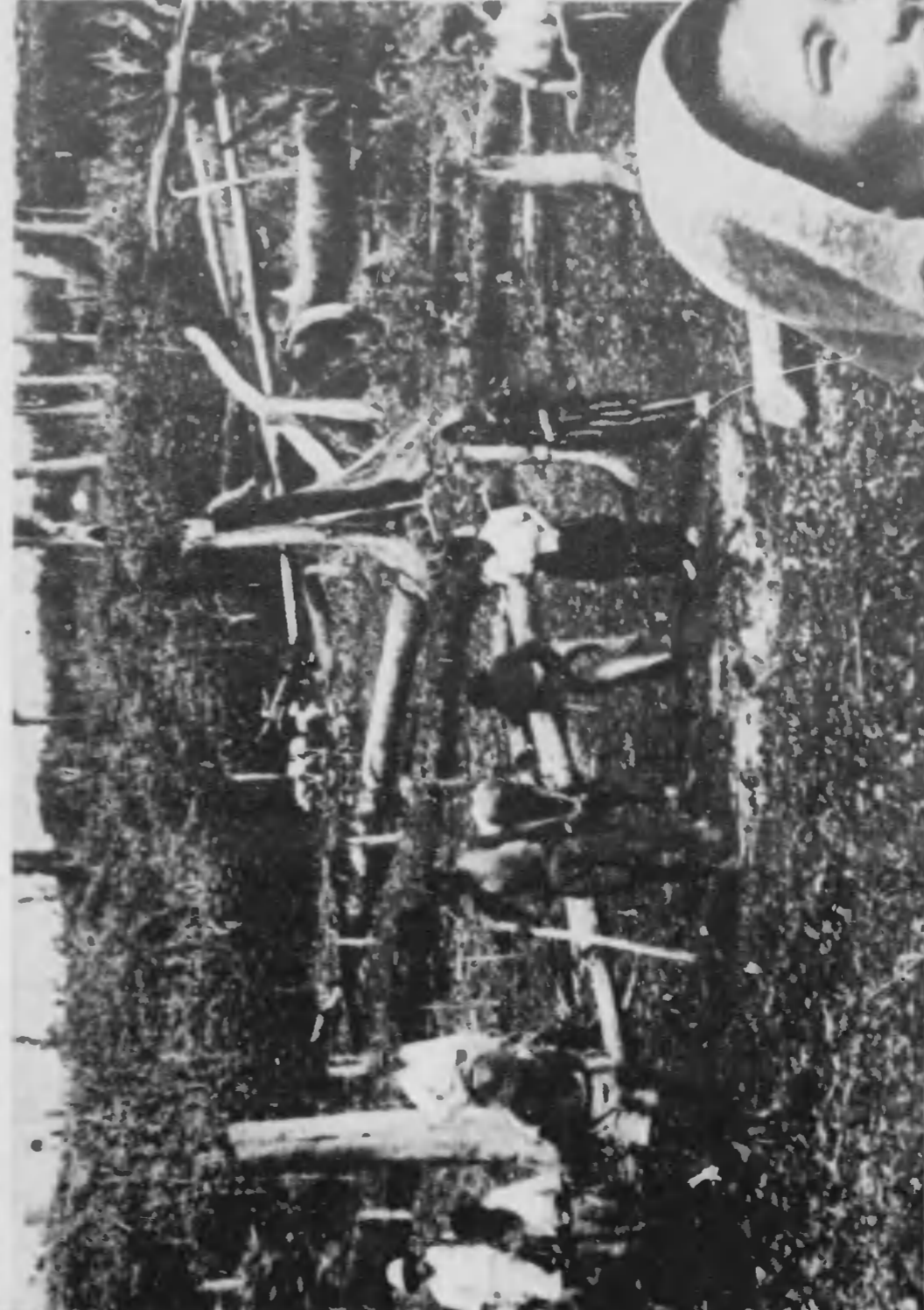
ジャワ 運河開通

ジャワのガヂリ州ボボにあるチタンボルダラ湖は毎年雨季になると必ず氾濫するので、農民が豊々と喜ぶとした農作物も水の泡となってしまうのが常であつたにも拘はらず、戦前の荷オランダ政府は灌漑技術を世界に誇りながら、これをどうにも出来なかつた。わが軍政影部が、昨年二月この工事に着手したことについては、すでに昨年九月二十二日(第二九〇號)の本誌に「ジャワの大治水工事進行」といふ題で既に報告した通りで、それから一年有半、戦時下の資材不足を克服し、階層と過地帯につきものの悪性マラリアと戦ひぬいた不屈の大和魂に感服が擧つて、運河は完成した。

いま平原に一線を區切つて賑々と流れてゐるこの運河によつて、湖地帯は畦へり、黄金色の稲穂が登る日も近いといはれるが、これこそ開闢され、伸びゆく大東亞の頼もしい姿である。撮影 ジャワ軍政影部

□ 最高指揮官によつてアリアは切れた。潮水は堰を切つてどつと運河へ流れ込む

大東亞の建設進む



北ボルネオ ガガセ農場

□ 明るく笑ひ、健れる健康。烈日の上で開拓に勤む娘さんたち。撮影 養殖課近衛員

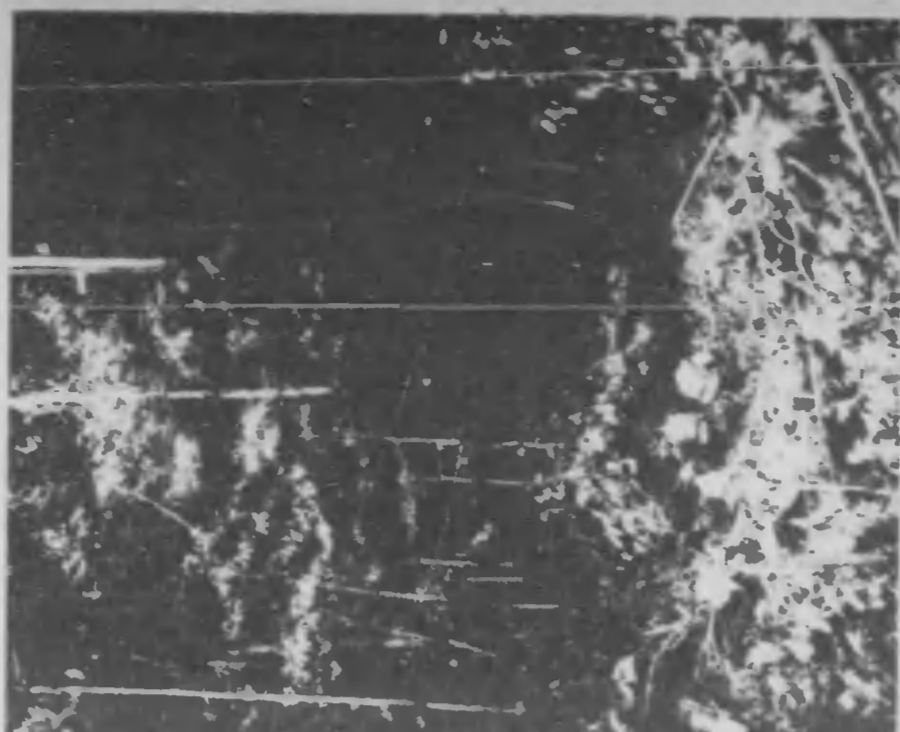
千古の密林に斧、鋸の音が響き、やがて果てしない沃野が耕されていく。これこそ赤道下の北ボルネオに敢闘する邦人開拓者たちの汗の戦果である。この多数の人々は、戦前、新務省の開拓民として南に新天地を求め渡航したもので、開闢とともに一時敵の手で孤島に監禁されたが、陸軍の護衛によつて救ひ出され、引續いての土の戦士として開拓に挺身してゐるのである。不屈の剛魂と血の努力とは大自然の恵みによくまれば、豊饒な産りとあつて伸びる日本の国力をいかに上にも、強めていくことであらう。

□ 廣漠たる熱帯の沃野、邦人拓士の手で開かれたまがマ大農場。—— 神で次をあげ種子を播いてゆく開拓者

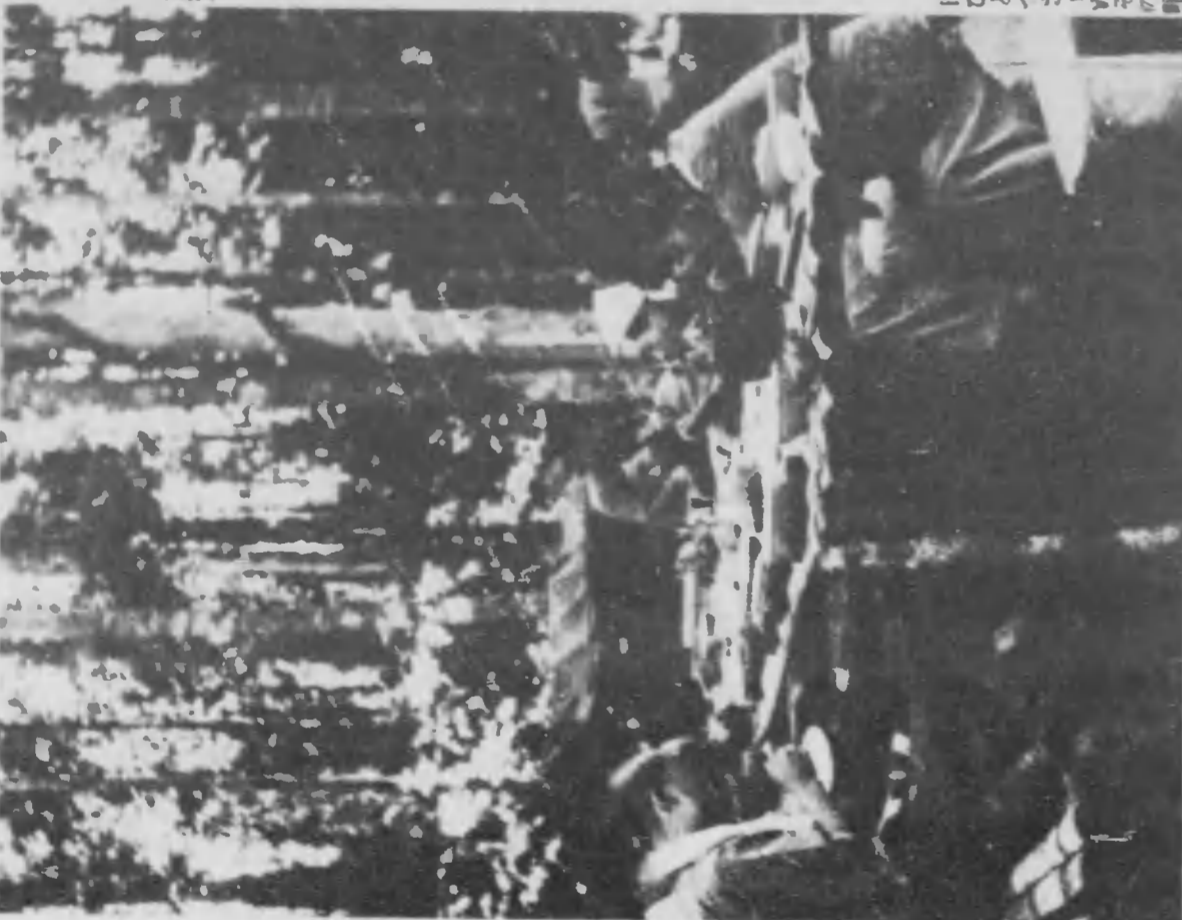




1 汽船から丸木舟に乗りかへて渡りつない船を渡り、いよ／＼と子部湖



2 大抵も州かんばかりの真木には種類がからみつき、全く密林には音も傳へない。川ひとつさゝぬその隙間の中を隊員は歩かされるやうに歩み分けて入つてゆく



3 水のしほは食糧だ。飯盒の蓋に置かれたのは今日の獲物、鯛の漬物であるが、味は鯛のさしみと似て中々いける。捕獲第二キャンプができるまで、魚は獲り次第から獲物を乾燥する方がよい。さらさら乾燥物を備蓄して、捕獲第三、第四のキャンプ地を建設して進んでゆく

「ニニギニアには石炭がある」

と確信して資源調査隊が乗り出したのは、大東亞戦争が勃発してすぐであつた。しかし、ニニギニアはわが本土の二倍もあり、しかも豊かなくらい密林に覆はれてゐるから、どこから探してよいやら見當もつかなくつた。一束のぞださへあれば、七日や十日は食物の確保ができるといふ原住民には、石炭など必要がないので、その名さへ知らない始末であつた。そこで連日石炭とはかういふものだといふことを原住民に教へてまねばならなかつた。からして苦心を重ねてゐるとき、ブア人が「奥地のマキオン族が教へぶしに集つてゐるものが石炭らしい」と知らせて来た。早速隊員がその部族にゆくとき、果して石炭であつたもの、河床から拾つて来たといふだけで、どこに炭層があるのかは分らなかつた。

兎に角も、石炭があることを知つた隊員は元氣百倍してこの部族を中心に、密林を這つぶしに調べていつた。野のむろ沼や湖まで渡するぬかるみをふみわけ、山蜂、蚊の大群に襲はれながら奥地へ奥地へと苦闘すること數十日、〇〇河にまさしく湧出した石炭の層を発見した。

日も好し、天長の佳節であつた。まこと、大獲達の賜であらう。埋蔵量は無算、しかも炭質は隊員があつと驚いたほど優れた有煙炭であつた。

實は聞かれた。この石炭ばかりではない。大東亞各地に眠つてゐた資源は、からして種々とわが手に取上げられ、戦力化されて、いま決戦に役立つてゐる。

6 獲物がまたも行く手をせよむ。四、五〇メートルもあろうか。巨木をきり倒して河岸から運ばれ渡さねばならぬ。隊員はもろろん、獲物の兵隊さん、原住民もみんな一生懸命で果敢作戦だ。



4 密林の底はじめ／＼と水溜り地とぬかるみと原までも入る水溜り地。樹影の知れぬ奥に備えられ、どよ／＼と同じ生活をかさねながら、奥地へ、奥地へと進む



5 清流へ出た。密林を這ぶとどよ／＼と水溜り地はきれいな水でマンブーができるらしきで、子供みたいな原住民と一緒にしやせつた。

ニニギニア 資源調査隊

7 「こんなに石炭の層があるぞ」
〇〇河岸、まるで埋蔵工場のやうに、石炭がファンタジーに湧出してゐた。しかも不思議なことに、本部のキャンプは、この石炭層の中央部の上に設けられてゐたことだ。 撮影 飯田謙博

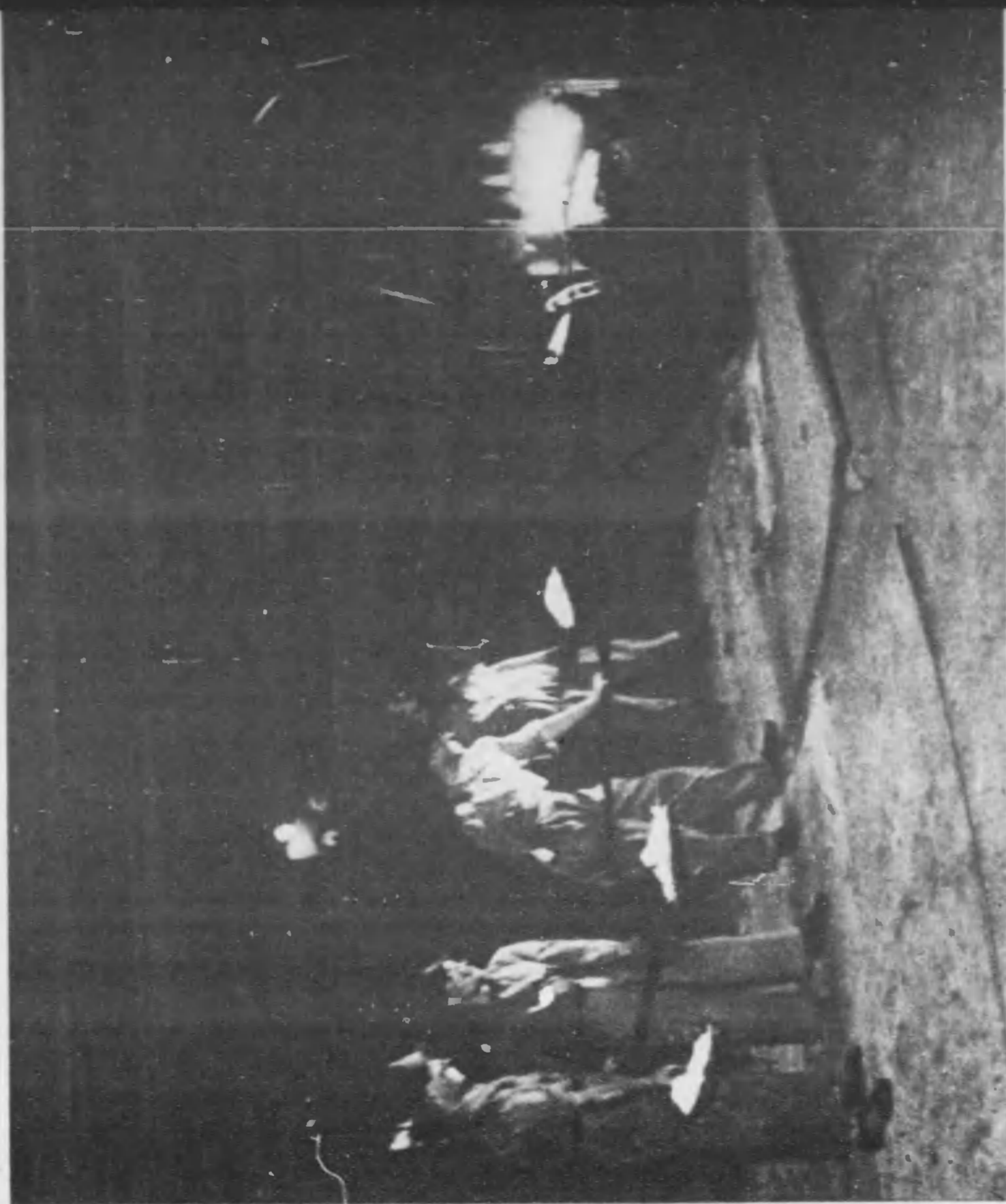
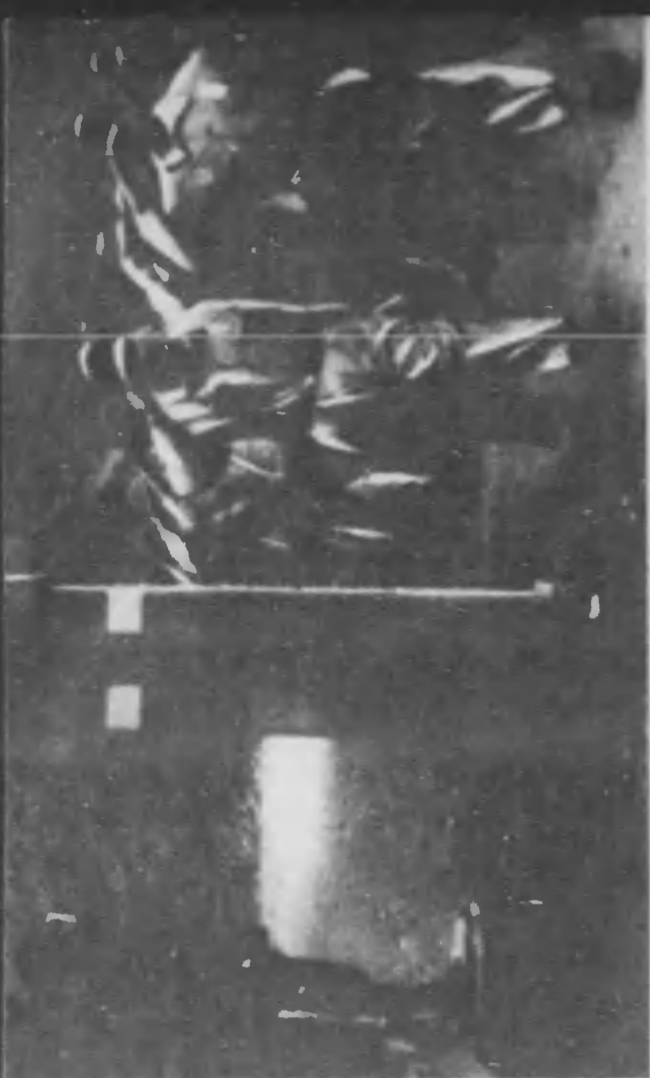




じつとみゆめままだし、きりつと引締めたり
 職敵必勝の意氣に、作業はつぎつぎと進んでゆく

もろれち い限のカ 人アソノ 闘敢に所鋼製

鐵門をくぐれば職場も戰場だ。慣れぬ操手の職人目
 然に揺る



ひつと通る火熱、あふ出る汗をものとも
 さず、シヤベルの手も休みなく、敵國ま
 だ敵國を掲げる

大戦果を掲げるわが工員の一語々々、
 わがことこのさりと共よらごび

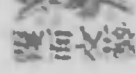
東西相呼んで諸敵米英の反攻を
 撃砕する新機を操り、日、獨、伊の
 提携はいよく固い

この時に當つて、わが國在留イタ
 リア人ボナチー、キニセラ氏性
 か二十四名のファシスト黨員も、産
 かな祖國への想ひを秘めて、共同戦
 争完遂の決意に燃え、兵器増産にと、
 都下、芝浦電機革製鋼所に率先挺身
 した

入所後、日在は濃く、作業にもま
 だ不馴れであるが、職場の人々の中
 に混じり、一般工員と何等異なること
 なく、或ひは灼熱せる電氣爐の前で、
 或ひは山と積まれた鋼屑に埋もれて
 終始、明朗取調を續けてゐる

今日の作業もどことほりなく終つた。ボ
 ナチー氏を圍んで、母國のなつかしい
 話談に、なごやかな興味がつづく

兵器増産のひまを別いつくつた職人に
 見事なつた作業の大戦果。自給自足の日
 もすぐ近い



是モ好シ

前回の耐震ひで軽井澤に滞在し、或る日、知人に誘はれて、小徳線の沿線に在る東樹園に出かけた。御承知のやうに、あの邊は土地高燥、日本中で一番標高の高い鐵道路線といふことになつてゐる。訪ねて行つた東樹園は林檎畑であるが、葉外線の多い高原の陽を浴びた風い畑には、紅玉、デリス、アス、國光等、種々な種類の林檎が枝もたははに生つてをり、その下の土には青豆が一面に植ゑられてあつた。

『どれでも好きなのを採つてお上んなさい』
 林檎畑の園主にさう云はれて、熱れた味しさらな飯をもちで皮ごと囃り出したが、二つも食べると、果汁の酸味が胃袋に滲れて手が出なくなつた。

問もなく箸飯を箱に詰めた。白い飯盛にキャベツの味噌汁、いい色に染つた布子の漬物、茹でた青豆といふ飯立であるが、その上にお内儀さんが鶏尾から生かたての卵をもつて来てくれた。あれもこれも運搬なくお代りして動けないほど詰めてこんだ。私共もよく食つたが、園主の子供達——五つと七つぐらゐの男の子達の食慾の旺んなのは、ちよつと驚かされた。

『もう朝から何かしら食へてゐるんですから、』といふお内儀さんの説明がたつた。食後には西瓜と玉蜀黍の焼いたのが出た。無理してそれも食べたい。『羨ましい生活だなあ』

汽車の時間まで、そこらあたりを腹ごなしに散歩をしながら、私がふとさう云ふと、知人は笑つて

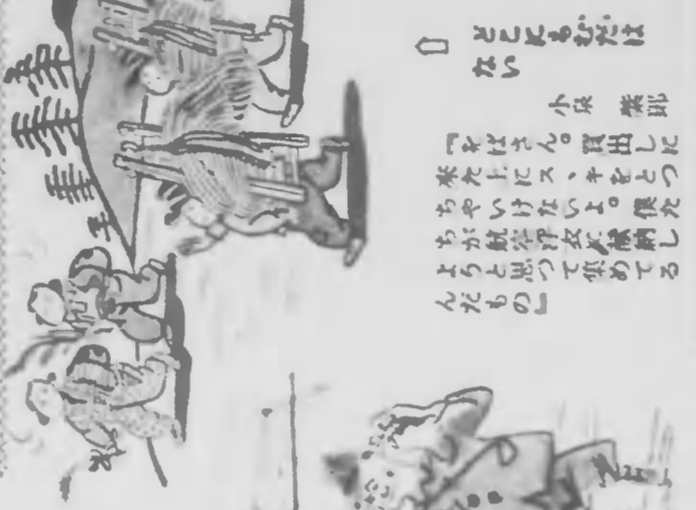
『いいぢやないか。日本では農民が一番人口が多いんだし、その人達が白い飯を炊き、野菜や山菜を採るのやうに腹一杯食べて、健全な肉體と中正な判断で國家ガラチリ支へていつてくれることは、何とも云へず頼もしいことだと思ふがね。』

『それあきらだ。じつさいその通りだよ』

と知人の感想を愉快に受け入れた私は、少し浮ついた調子で、その場の事情と何の關係も無い譯の言葉を口から出まかせに呟いた。

『是モ好シ、山堂無月ノ夜——かね』

編者 杉 紅夫
 『あなた、しつかりして、米袋を破るまでのびちやだめよ』



耳に 松 手
 『よう、昨日はどうだつた、うちの工場がやらせてね』
 『わしやさういふ話はいつさい耳にせんだよ』

栄戦足命



『おや、あの飛行機は何か、』
 『おや、あの飛行機は何か、』
 『おや、あの飛行機は何か、』

『おや、あの飛行機は何か、』
 『おや、あの飛行機は何か、』
 『おや、あの飛行機は何か、』



先妻久納中尉に捧げ

神風特攻隊大尉久納中尉の母法政大學では、この運動會で大先輩に捧げると題して、某工場に勤員中の後援は、直ちに該隊大尉を聞いて機場飛走の決意を誓つたが、十一月二十八日午後一時向大空で「神風特攻隊大尉久納中尉法政大學大先輩大會」を開催し、小山總長の御影の辭、海軍報道部長兼大佐の講演、總長をあらわにした全隊員は、さらに殉國神社に行進して参拝し、宮庭前で萬歳を奉唱した。

国民合唱

すべてを空へ

作詞 西條八十 作曲 弘田大祐

空へ 空へ すべてを空へ
 いまこそうち上げよ 燃えたる情
 空を 空を 空を 空を
 男は 男子 女は 女子
 ともに ともに ともに ともに
 すべてを空へ
 空を 空を 空を 空を